

明治期におけるミクロネシア関係文献(追録)

山口 洋 児

この追録は、本誌第32号(1986.10)で紹介した同題の補遺である。今回は前回未掲載の水路誌関係と新聞記事が中心である。

単行本

鼎軒田口卯吉先生伝 経済雑誌社 明治45年 432p

〈明治の南進論客で又、実行者でもあった田口卯吉の伝記で pp33~34に彼の南洋貿易に関する記事がある〉

明治44年遠洋航海記念写真帖 同刊行会 明治45年 1冊

〈軍艦阿蘇、宗谷による遠洋航海の写真帖で pp4に18枚にわたり、当時のグアム島の首都アガナ市の風景などが掲載されている〉

増訂和訳地理全志 巻一~巻七 阿部国弘 明治7年 全7巻

〈中国上海にて発行された英人ウィルヘルム・ムーアヘッド中国名墓維簾著の漢文の地理書『地理全志』(全10巻)の和訳である。原本とも云うべき『地理全志(上)』(全5巻)太平洋群島志は安政3~5年漢文のまま日本で再刊されているが、この和訳となっている。あいまいな表現となってしまうが、実はこの増訂和訳版では現在全7巻のうち4巻しか見当たらないのである。

国会図書館、早大図書館等所蔵本全巻7巻(原著は10巻)となつてはいるが『亜西亞南洋群島志』『非里比納群島志』『蘇門答臘島志』『爪哇島志』までは存在するが、本文にあるその後の『澳大利群島志』『東洋群島志』『南黒道群島志』『大洋孤島志』などは全く見当らない。他の文献等に当たって見たが、増訂和訳版は明治初期に於て各種学校の教科書に使われたことがあるとの事のみで、完訳が出たかどうか確証がない。本稿で取扱っているミクロネシアについては『東洋群島志』の中に含まれマリアナ、カロリン、マーシャルなどの群島についてふれている筈なのであるが、この部分が、和訳版で、実際に発行されているかどうか、今一つ確証が上らない。もし実際に発刊されているとすれば、ミクロネシア文献の中でも極めて初期のものに位置づけられるものであるので、あえて、取上げてみた)

※なお、明治期に於いてミクロネシア文献史上、確固たる位置を占める鈴木経勲が、後年の文献の中で、「南洋」という言い方は、自分の発明であると云っているがこの明治7年の『増訂和訳地理全志』巻七の中の「亜西亞南洋群島志」の表題を見れば、明らかに彼の発明と云うのは誤りと云はざるを得

ない。

関係参考文献

鎖国時代日本人の海外知識 乾元社 昭和28年 pp 156~157

海軍水路局発行文献

「濠洲廻航記」 水路雑誌46 海軍水路局 明治15年

〈水路雑誌とはなっているが、各号独立した航海記となっており、当時の海軍々艦が、練習航海をした時の航海記や水路誌などの参考記事を各航海毎にまとめたもの。46号とあるから、本航海前にも多くの航海がなされ、航海記事は出されているがマイクロネシアにふれた記事では此以前のは見当らないので目下の所古いもの一つとなっている。記述は海軍大尉吉田重親、同少尉井上敏夫によるもので、この中で現在のクサイ島（現コスラエ F. S. M）に関する記述があり同島の遠望図が挿入されている。クサイ島に関する記述は pp40~45 にあり簡単なが島の様子、レラ港、人口等の説明があり、他に当時棧帆船モーニングスター号で東カロリン地区の宣教に活躍していたアメリカ人、スノーに関する記述があるが、これなどはキリスト教布教史の参考となろう〉

「太平洋西部エリス・ギルベルト・マーシャル群島」 水路雑誌78 海軍水路局 明治17年

〈前記同様に海軍による練習航海に際して作られたものであろうが、前書きに、英国水路誌36号（1883年発行）を翻訳したものである旨の記述がある。翻訳は水路局員肝付五郎、東方覚

之による。内容は水路誌でエリス諸島、現ギルバート諸島、マーシャル群島の各主要島に関して pp1~35 に記述してある。後年珊瑚島とする表現を石花島としてあるのも興味深い〉

「竜驤艦南北太平洋航海略記」 水路雑誌 88号 海軍水路局 明治17年

〈完全な練習航海記で海軍大尉高木英次郎、同少尉荒木亮一によるものであるが、pp4~5 に、マーシャル諸島のビキニ島近海を航行した時の記述があるだけで具体的に、これらの島々に関する記述はない〉

「太平洋エリス、ギルベルト、マーシャル列島等」 水路雑誌90号 海軍水路局 明治17年

〈前述の水路雑誌78号と同様に英国水路誌7号（1884年）の翻訳とある。翻訳は森専八、東方覚之によるものである。前号78号よりも大分詳細にわたり各島に関する記述が見られ、エリス、ギルベルト、マーシャルのみならず、ポナベ島、パラオ島、ペリリユー島等を航海した英国のエスピーグル号の航海記をも加えて翻訳したものである。pp1~37 にマイクロネシア上記の島々に関する記述がある〉

「南北太平洋回航記」 水路雑誌97号 海軍水路局 明治18年

〈明治17年2月~11月に軍艦筑波がニュージーランド、南米からハワイ経由で回航した際の航海記であり、海軍大尉高杉春祺、同少尉坂本一の記述による。マーシャル群島、カロリン群島、クサイ島などの近海の航行の記述があるが、上記の島々には寄港しておらず、単に風向、風力、天候等に関する記述のみである。pp1~31〉

「寰瀛水路誌」第15巻 海軍水路部 明治19年（副題北太平洋諸島）

〈「かんえい水路誌」と読み“寰瀛”とは大海、河川、天地を表す言葉とある。本水路誌は太平洋に関する水路部発行文献中最大のものであり、本文586頁他索引17頁に及ぶ大冊である。これは序によれば海軍々属岩間俊次郎訳とあり本来、A. G.フインドレー（英国）の北太平洋水路誌第2版（1870年刊）の翻訳である。水路誌とあるが内容を見ると、単なる港湾、水路などの針路誌でなく、民族や島々の状況から、発見者や発見史に及び又複数のレポートのある場合には、各レポートを比較して、検討し批評を加えてある。これによって当文献は単なる水路誌にとどまらず、航海史、地理上の発見史、民族誌、地理誌として、非常に価値あるものとなっている。この様な太平洋島嶼地域の解説書で、これだけまとまったものは現代に至るまで見当たらない。現代の太平洋地域の研究者にとっても重要な参考文献であるが、残念なことに、本文は存在が極めて少なく、現海上保安庁水路部でさえ、大正12年の大震災時に焼失してしまい欠号となっており、国会図書館にわずかに一部あるのみである。これも又一日も早い復刻が望まれる文献の一つであろう。

なお、前号にて紹介した横尾東作による翻訳本『南洋群島独案内』は本原書の抄訳であることがうかがえる。又、当文献リストの範囲とも云うべきマーシャル、ギルバート、カロリンなどの各群島については、1885年の英国海軍水路部の刊行による、太平洋諸島の報告及び他の報告によって増補を行った

旨のただし書を付す。＊）

関係文献

『水路部80年史』（同誌刊行会）、『水路部100年史』（同誌刊行会）の「南洋群島独案内」（A. G.フインドレー、横尾東作訳）

＊この様に本書は大変貴重な文献であるが我々は誠に奇妙な事実を発見する。と云うのは、此等の水路誌や水路雑誌が前年明治17年に、遠くマーシャル群島まで探検旅行を行い、同18年に帰国し極めて詳細な報告を提出した鈴木経勲レポート（前号32号参照）について全くふれていないことである。マーシャル群島の中のラリック列島等について、誠に詳しい報告書が外務省に提出され、天覧にさえなっているにもかかわらず、各水路誌では全く無視されている。この事は、マーシャル群島に日ノ丸の国旗を掲げ、占領を報告した後藤猛太郎、鈴木経勲に対して時の外務卿井上馨が激怒し、翌年、直ちにこれを取りはずしに行かせていることに関係があるのかもしれない。経勲レポートが極秘扱いとなり、一般に公表されず、ほとんどもみ消し同様の扱いを受けていることは、当時の外国との条約改正に全力をあげている時の政府にとっては邪魔にこそなれ、迷惑至極なことであったのであろう。この様なバックグラウンドから、探検調査に軍艦を使えなかったこと、水路誌などから全く無視されてしまったことに関係があるかも知れない。しかし時の新聞の口は閉ざす事は出来なかったと見えて、後述の通り、多くの記事が公開されてしまっているが、占領云々につい

ては全く報道されていないものである。

※原著者フィンドレーは、ALEXANDER, GEORGE, FINDLAY. (1812~1875)であり、ロンドン生れの著名な水路、地理学者である。彼の祖父も父も又高名な地理学者であり (1790~1870) 幾多の業績を持つ。本書の著者フィンドレーも『南地中海』『インド半島及中国と日本』『インド洋』『南太平洋』などの地理書、水路誌などの著作があり王立地理学会の重要メンバーの一人である。

雑誌記事

「英国海権建設者ドレーキの世界周航」

探検世界1-2 明治39年

〈イギリスの海賊船長フランシス・ドレークの伝記であり、航海の概略を紹介している。彼はパラオ島なども訪問しているが当記事ではふれていない〉

「本邦来航の磁力測定船」 探検世界1-5

田村哲 明治39年

〈太平洋地域の磁力の測定船の横浜寄港の記事でグアム島などにて測定を行った事を記する〉

「日本人と南洋蠻人不思議の衝突」 探検世界2-2 高田大観 明治40年

〈東カロリン群島トラック島にて、日本の南洋貿易会社の所属船天祐丸の乗組員が現地人との間に誤解に基づく争いを引起し、部落民間の戦争にまで拡大してしまった経緯を面白おかしく記事にしたもの〉

「太平洋上の怪島実譚」 探検世界3-3

橋本孝三郎 明治40年

〈ギルバート諸島の一島にて生活した橋本氏の生活談である〉

「南洋無人島の一ヶ月」 探検世界6-2

山川無涯 明治41年

〈マリアナ群島の孤島に鮫漁に行った当時の冒険家の報告である〉

「大宝丸の南洋巡航」 探検世界7-4 江

見水蔭 明治42年

〈交易漁船大宝丸によるマリアナ諸島及カロリン諸島の航海物語であり、当時の交易漁船の実態が読みとれる〉

「珊瑚礁海底大探検」 探検世界10-6 間

宮平吉 明治43年

〈当時の貿易会社恒信社はカロリン群島パラオにて貿易を行っていたが、同社の交易船長風丸の航海記であるが、当時のパラオ島の様子が比較的詳細に記されていて興味深い〉

「南洋鱻漁日記」 探検世界11-1 間宮平吉 明治43年

〈前号の続篇で、当時のパラオ諸島の事情や現地人の生活が詳細に述べられており興味深い〉

※上記の各篇を見ると当時、正式には全く国交のなかったミクロネシアに、交易船というか、漁船というか、いわゆる一発屋のグループによる航海がしきりに行われていた事がわかる。南海の樂園を夢見る者、一獲千金を夢見る者、ほとんどが、当時のパスポートやヴィザなど全く持たぬ冒険者達が、小さな機帆船に乗り込み、荒波をけて走り回っていた事がうかがわれ、確固たる思想としての南進思想とは全く無縁の一般庶民の南への意識、認識がうかがえる資料と云えよう。

新聞記事

前回(参考書誌研究32号)にも書いたが新聞記事のリストアップは、非常に困難である。唯一、漠然とミクロネシアに関する記事をリストアップするには全新聞の全記事に目を通じ拾っていかねばならないが、これは物理的に不可能なためテーマをしぼって調べることにした。明治期のミクロネシアと日本との関係で最大の事件は明治16年に発生したマーシャル群島に於ける日本人漂流水夫の殺害事件であろう。(詳細は参考書誌研究32号参照)此の事件は、後に種々の文献に取りあげられたが、今回はこの事件にしぼって代表的な新聞記事をリストアップした。取上げた新聞を代表的と云うことについては色々な議論もあろうが、この事件を比較的大きく取扱っているものと考えていただきたい。なお、当時の新聞は「見出し」がほとんどなく、ベタ記事の中から拾いあげたため見落しもあったことと思われるのでお気付きの方の指示を仰ぎたい。

ちなみに、一部前号32号の記事と重複する部分のあることを了承されたい。又本記事は第一報は英字紙ヘランドに載り、これを各日本紙が取上げて詳報したのが実際らしいし、又その旨明記している邦字紙も少なくない。なお本事件の第一報がなされたのは明治21年7月20日号である。

東京横浜毎日新聞

「外務省准奏御用係後藤猛太郎は今般濠州地方へ出張云々」明治17年7月31日号

「マルシャル群島事情」同18年8月2日号

「マルシャル群島事情続」同17年8月

3日号

「マルシャル群島事情続」同17年8月5日号

「マルシャル群島事情餘聞」同17年8月7日号

〈明治17年7月22日号、23日号、明治18年1月11日号、21日号、23日号、29日号については本誌32号新聞の項参照。各新聞の中では最も当事件関連記事を取り上げ通算して11回にわたり、解説とニュースを載せている。又他新聞も当新聞記事を参照して記事を書いているものも多い〉

読売新聞

「日本人遭難」明治17年7月23日

「マーシャル群島は是班牙の属地なるが如し」同17年8月2日号

「マルシャル群島事情」同17年8月3日号

「マルシャル群島事情続」同17年8月4日号

「マルシャル群島事情続」同17年8月5日号

「マルシャル群島事情餘聞」同17年8月8日号

「マルシャル群島の景況」同18年1月27日号

〈最初の2号はマーシャル群島と書き、後はマルシャル群島と書いているが、他新聞が皆マルシャルを使っている為、これを使うことにしたらしい〉

朝日新聞

「昨年10月頃マルシャル群島云々」明治17年8月7日号

「マルシャル群島の話続」同17年8月8日号

「マルシャル群島遭難事件」同17年8

月9日号

「南洋探検実記」(書評) 同25年8月17日号

「先取又先取(社説)」 同25年9月30日号

時事新聞

「日本水手殺される」 明治17年7月21日

〈横浜で発行されていた英字新聞へラルド紙からの引用記事である〉

自由新聞

「日本人暴殺せらる」 同17年7月20日号

「鑑戒前にあり」 同17年7月27日号
〈前号ではニュースとして記載し、後号では論説として、前年台湾にて日本人漂流民が殺害せられたのを契機に台湾征討の起った事に言及して論じている〉

東京絵入新聞

「此ほど横浜へ入港せし英国帆船アダが云々」 明治17年7月22日号

「先の日英国船アータ号云々」 同17年8月1日号

〈当時の新聞は他からのニュースの

借用など全く気にしていなかったらしく、借用ニュースの原紙朝野新聞の名まで出しているのも面白い〉

朝野新聞

「今回南洋の群島なる云々」 明治17年7月20日号

「先日英国商船アータ号云々」 同17年7月31日号

「彼のマーシャル群島において云々」 同17年8月5日号

〈朝野新聞は最初マルシャルと書き後にはマーシャルを使用している〉

郵便報知新聞

「日本人虜辱さる」 同17年7月21日

「日本人虜辱さる続」 同17年7月22日号

「日本人虜辱さる続」 同17年7月23日号

「エータ号帰着」 同18年1月23日号

〈内容はほとんど各紙と同じであり、他紙を参考にしながら書いた事がうかがえる〉

(やまぐち・ようじ (株)アサヒトラベル
インターナショナル)